# 変えよう！ 日本の学校

## カナダ人英語教師が提唱する “エンパワーメント”（活力を与える）教育

**自分の頭で考え、自分の力で行動する人間を育てる！**

このままでは
日本は駄目になる。

日本の子どもたちはもっと「心」のこもった教育を受ける権利があるのです。
現在の日本の英語教育を鳥瞰すれば、日本の教育界の全体が見えてくる。日本を愛する、札幌生まれのカナダ人である著者が 30 余年にわたる教師経験から真情を吐露！

ピーター・ハウレット 著／ハヌル・ハウレット 監修・訳
1,400 円（税別）　978-4-434-23553-5 C0095

**誰もが天才だ。しかし、魚の能力を木登りで測ったら、魚は一生、自分はだめだと信じて生きることになるだろう。**
**――アルベルト・アインシュタイン**

るでしょうね。
　それから、大変なのは部活です。勝つことが目的になって、土・日も練習で音楽やスポーツの本来の楽しさなんて忘れている。

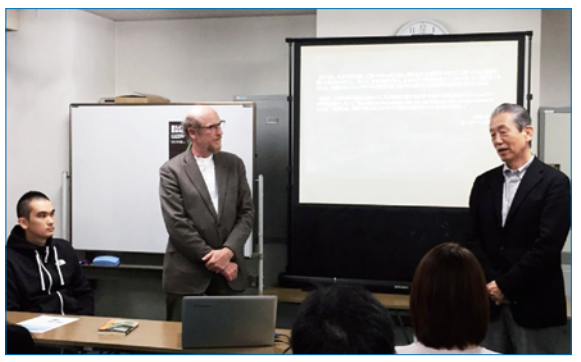
**H**　生徒の自主性に任せないで、先生が上から取り仕切っている感じがします。

**P**　アインシュタインの言葉に『誰だってみんな天才なんだ。しかし「木登り」で能力試験をしたら、魚は「低脳」の烙印を押される。』というのがあります。テストでしか人を評価しない悲劇ですね。
　受験校では年に10回模試があります。休日の朝から夕方まで、座りっぱなしでテスト漬けだなんて「いじめ」じゃないですか？
　しかもテストの作成と運営は塾という大産業が担っている。日本の教育システムは実のところ、塾に支配されているんです。
　怒りのあまり、話が広がりすぎましたが、僕が一番主張したかったのは、本書の副題にも使っている「エンパワーメント」(Empowerment)という考えです。つまり、「生徒を活力（パワー）あふれる状態にする」教育でありたい。上から下へ知識を投入するのではなく、生徒の好奇心を促し、生徒が自主的に考え、行動する。そういう一人ひとりが持っている「力」を「活かす」方法を見つける手伝いをするのが親と学校教育の役目だと思います。

**編**　そう聞いて、本書の内容がぴったりとつながりました。今日はありがとうございました。

【注1】ステファン・クラッシェン(Stephan Krashen)　米国言語学者。理解可能なインプットを通して、外国語を学ぶことが大事だというインプット仮説を提唱している。

【注2】不安感やストレスなど言語習得を阻害する心理的障害のこと。


札幌市内で行われた出版記念講演会にて（写真左から：ハヌルさん、ピーターさん、柏艪舎代表 山本光伸）

＊＊＊＊＊

【後記】
　能弁で明るく外向的なピーターさんと、物静かで冷静沈着な雰囲気のハヌルさん。対照的でありながら、会話のはしばしに互いに対する信頼が見てとれる素敵な親子で、本書の共作が成功したのもなるほど、と納得です。
　お二人と話していて一番印象に残ったのは、「社会の大勢に与せず、自主性をもって、人間らしく生きよう」とする真っ直ぐな姿勢でした。それはきっと、「自然の中で食材を育む」という「農」のバックボーンが代々しっかりと受け継がれているからでしょう。
　本書は、「人間らしさ」を損ねているとしか思えない、日本の学校教育の現状を変えたいと願うお二人が投じる一石です。
（聞き手：編集部　山本基子）

【おすすめ本ピックアップ】

# 『死刑囚 永山則夫の花嫁』出版報告の旅

永山則夫元死刑囚が処刑され、今年で20年。
書籍出版を報告するため、私たちが訪れたのは、
永山の思い出の地、網走だった。

永山則夫が幼い頃に遊んだという砂浜で出版の報告。奥に見えるのは帽子岩。

　9月初頭、ずっとお会いしたいと思っていた女性にお目にかかることができた。永山則夫の元妻、和美さんだ。２０１７年2月に弊社より刊行した『死刑囚 永山則夫の花嫁――「奇跡」を生んだ４６１通の往復書簡』には「ミミ」という愛称で登場する。
　本書で永山則夫と文通をしていた頃のミミさんは24歳から26歳。豊かな愛情表現で、明るく優しく永山を包み込むミミさんの手紙に、私も虜になってしまった。こんなにも純粋に人を愛せるのか、こんなに素敵な人がいるのか、と感動しながら編集作業を進めていった。ミミさんが初めて永山に手紙を書いてから37年。実際にお会いした彼女は、そんな月日を感じさせず、まるで手紙の中からそのまま飛び出してきたかのような印象だった。周りの人をパッと明るくしてしまう、純粋でとても素敵な方だった。
　１９９７年8月1日、永山則夫の死刑が執行された。ミミさんは永山とは離婚していたものの、「遺骨は網走の海に撒いて欲しい」という遺言を忠実に実行した。永山則夫の墓はない。私たちは、永山の没後20年目に刊行した本書を携え、ミミさんが遺骨を撒いた網走の海へと札幌から車を走らせた。同乗者は、ミミさんと本書の編者である北海道新聞社の嵯峨仁朗氏、弊社代表の山本光伸、それに私の四人だ。
　永山が生まれ、5歳まで暮らした網走。永山にとっては、幼い頃兄弟とともに母親に置き去りにされたトラウマがある一方で、唯一やさしくしてくれた姉との思い出が残る地でもある。網走の帽子岩の見える砂浜で、姉と一緒に貝殻を拾って遊んだという思い出をミミさんに話してくれたそうだ。ミミさんが以前網走に行った時にその砂浜を探したが、見つけることはできなかったという。
　網走港の入り口に見える帽子岩をなるべく近くに望めるところで、本書の刊行を永山に報告したいと私たちは車を走らせた。車を止めて歩きだすと、私たちを案内するかのように野良犬が待っていた。何気なく野良犬のあとをついて歩いて行くと、目の前に現われたのは、永山が姉と一緒に貝殻を拾って遊んだにちがいない砂浜だった。帽子岩との位置関係からそう確信できたのだ。ミミさんの喜ぶまいことか。こうして、没後20年目という節目に永山の思い出が残る砂浜で、永山が好きだったというリンドウの花と線香を手向け、本書の刊行を報告することができた。
「殺した四人の方の命を抱いて、海深く眠っているよ」という永山の声が聞こえてきた、と海を眺めながらミミさんはそう口にした。遺族の方々の苦しみも、永山の犯した罪も決して消えることはない。没後20年経っても永山則夫が語り継がれ、殺された方々のことも語り継がれていく。彼らを忘れないということに意味があるのではないか、とも。
　その日は雨の予報だったが、私たちを歓迎するかのように、晴れ渡っていた。
（編集担当　可知佳恵）

市立小樽文学館での企画展「凍った心をとかした手紙 奇跡の４６１通」永山則夫と和美さんの往復書簡が展示された。

## あなたは、こんなにも純粋に人を愛したことがありますか？

１９６８年、全国を震撼させた連続射殺事件。
捕まったのは貧しく愛を知らずに育った19歳の少年、永山則夫だった。
永山が獄中で書いたベストセラー『無知の涙』を読んで、アメリカから1通のエアメールが届く。
それは一つの「奇跡」が始まる瞬間だった。

死刑囚 永山則夫の花嫁
「奇跡」を生んだ４６１通の往復書簡
嵯峨仁朗・柏艪舎 編
2017 年 2 月刊 1,700 円（税別）